19 世紀の日本における紙に描かれた油彩画の特徴と劣化

美術研究科文化財保存学専攻保存修復油画研究室
(1320931)ミクロプル・エフシミア

本研究は、明治期の日本における紙に描かれた油彩画について、その素材特有の保存状態を考察するものである。18 世紀初頭のヨーロッパにおいて、紙はキャンバスに代わる手軽で安価な素材として画材会社が販売し始めた。日本では幕末から明治初期にかけてキャンバスだけでなく紙にも油彩画が描かれるようになった。本研究ではまず、油彩画の支持体として使用された紙の歴史と、そのサイジングや地塗りなどの素材に着目する。次に、紙に描かれた油彩画について、これまで保存油画研究室で行なわれてきた紙を支持体とする油彩画の光学調査や修復作業で得られた情報を整理する。さらに東京藝術大学大学美術館が所蔵する 25 点を改めて調査することで油彩画が描かれた紙の支持体の特徴や劣化を把握し、今後の保存や修復に役立てることを目的とする。

第 1 章では、油彩画の支持体として使用される紙についての研究史を概観し、その使用開始時期や理由など国内外の事例を検証する。海外で、18 世紀後半には油彩画専用の紙を製造する工場も現れた。19 世紀には油彩画用に作られた紙の支持体が市場に出回り、ミルボード、アカデミーボード、オイル・スケッチング・ペーパー、ソリッドスケッチブロックなどと呼ばれ、絵画技法書にもそれらの材料や地塗りの方法について言及されるようになった。日本では、高橋由一の談話などにおいて油彩画の支持体としての紙の記述が見られる。本章ではこれらの先行研究をまとめている。

第 2 章では、東京藝術大学大学美術館所蔵の紙に描かれた油彩画 25 点の光学調査をまとめた。可視光線および紫外線などを用いた光学調査を実施し、さらに地塗りの成分を把握するためにX線透過撮影や蛍光X線分析を行なった。日本では 19 世紀後半から油彩画用の紙製支持体が販売されており、それらはヨーロッパからの輸入品であると論じられてきた。紙を硬い紙に貼ったもの、キャンバスに貼ったものなどさまざまで、ミルボードのような厚紙も存在する。当時の画材店のひとつ、伊藤彩料舗で売られていたミルボードを使用しているものやイギリスの Reeves＆Sons 社のミルボードを使用している作品を確認した。また、地塗りが施されていない作品も見られたが、ほとんどの場合、キャンバスに描かれた作品と同様の白亜と鉛白の地塗りが確認できた。伊藤彩料舗のミルボードの地塗りには、亜鉛華が含まれており、この顔料は 19 世紀後半の日本において、キャンバスの地塗りに多く使用されたものである。一方、海外のミルボードには亜鉛華は含まれていないことが判明している。従って、伊藤彩料舗が自社で地塗りを施したミルボードを製造していた可能性が高いと考えている。

第 3 章では、前章で行なった調査結果をもとに、紙に描かれた油彩画の保存状態を考察する。初期の記述では、木製のパネルやキャンバスには耐久性が劣るとされていたが、実際には、紙の支持体の保存状態は良好であることが確認できた。紙に描かれた油彩画はキャンバスに貼られ、さらにそれを木枠に張り込んであるもの、より硬い紙の支持体に固定されたものなど、その他の支持体への固定作業が行なわれ補強されている。これは文献からも確認でき、20 世紀半ばの保存修復の指針などにおいても紙に描かれた油彩画はキャンバスに接着し、木枠に張り込むことが一般的であったと書かれている。

さらに最終章では、先行研究を利用しながら、これまでの調査結果と対応させ、本研究で得た新しい情報をまとめる。油彩画の支持体としての紙そのものの特徴、保存状態を検証することにより、今後の劣化を予測し、さらに保存修復のあり方について提案することが期待できる。